

# 体育授業における効果的な支援

## —運動嫌いと体育嫌いに着目して—

佐野 汐里 ( 群馬大学 )

### 1. 目的

体育授業の充実のためには体育嫌いや運動嫌いをなくすことが重要であるが、両者はしばしば混同されて用いられる。そこで本研究は、体育と運動の違いから体育嫌いと運動嫌いの違いを明らかにし、体育授業におけるより良い支援方法を提示することを目的とする。

### 2. 研究方法

本研究では文献学的方法を用いた。上記の研究目的へのアプローチとして3つの課題を設定し考察を進めた。一つ目は、運動、スポーツ、体育についてその定義、語源、歴史を検討すること、次に体育嫌いや運動嫌いの定義・実態・要因を整理すること、最後に体育嫌いと運動嫌いの相違を明らかにし教師、教材、集団・場の視点から支援方法を検討した。

### 3. 結果と考察

#### 1) 用語としての「運動」「スポーツ」「体育」

体育は、身体活動を通して、身体や精神を発達させる等多様な目的を達成するために行われる意図的・計画的な活動であり、学校教育活動におけるその目的は国の政策に影響され時代や社会によって変化するものである。運動は、体育より広い意味で捉えられ、競争や自己記録更新、楽しみなど多様な目的を持った身体活動であり、それを行うこと自体を目的として行われる自発的な活動であり、その目的はその時代の社会や人々の状況に影響される。スポーツは、遊びにルールが加わった身体活動で、競争を経て記録の更新を目指す実態概念としての文化概念である。

#### 2) 体育嫌いと運動嫌いの現状

体育嫌いは、計画的・組織的に行う体育授業に対して非好意的であることである。実態は女子に多く、中学校3年生がピークであることが報告されており、その要因は、劣等感、教師・授業形態・規律、小中のギャップ、性格、発達段階の5つに分類できた。

運動嫌いは、体育を含む自発的に行う身体活動一般に対する嫌悪感である。その実態は、体育などの様々な経験を通して好意度が変化し得るもので、その要因は、体育、劣等感、家庭環境、性格、負の経験、身体的状況、運動への積極性の7つに分類された。

#### 3) 体育嫌いと運動嫌いの考察と効果的な支援方法

体育嫌いは、自己の欲求に合わない画一的な活動、強制的な活動、周囲に負の影響を与えることに対する嫌悪感から生じる。また運動嫌いは、これまでの経験から運動欲求が歪められ、自発的に行う活動が面倒といった要因から生じている。以上を踏まえた体育授業の効果的な支援方法として、教師行動としては、動機づけ、価値づけ、積極的な声かけ、子どもの理解が大切である。教材内容としては、個人に合ったレベルの設定し、協力できる題材の設定、競争場面への配慮、子ども視点の教材の工夫が必要である。また、集団・場の配慮は、発達段階や人間関係に配慮した小集団の形成、子どもが納得した規律の確立、技能レベルや発達段階に合った場への対応が求められる。

### 4. 結論

体育嫌いは、人間関係に負の影響を与える環境や方法で行われる、非自発的活動への嫌悪感である。また、運動嫌いは、本来持っている運動欲求が、過去の負の経験や環境の不整備等の要因によって歪められた状態である。よって運動嫌いや体育嫌いをなくすためには、運動への動機づけを高め、運動欲求を妨げる諸要因を取り除き、自発性を確保した個々の運動欲求に合った授業を展開することが大切であることが明らかとなった。

### 5. 主な参考文献

1) 佐藤臣彦(1991) 体育とスポーツの概念的区分に関するカテゴリー論的考察, 体育原理研究, 22 : pp.1-12